様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００８０３

研究課題名（和文）トゥールミン・モデルを活かした批判的論理的思考方法の開発とその多角的教材化の研究

研究課題名（英文）Devising a methodology and teaching materials to develop critical thinking based on the Toulmin Model

研究代表者
椎名　紀久子（SHIINA, KIKUKO）

千葉大学・大学院国際学術研究院・名誉教授

研究者番号：４０２６１８８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的はクリティカル・シンキング力を養成するために、トゥールミン・モデルを活用した指導法と学習用教材を開発し、教育現場での試用を経て指導者や学習者からフィードバックを得ることで、今後の指導への指針を得ることであった。その結果、『図解で学ぶクリティカル・シンキング：トゥールミン・モデルを活かして』を出版し、付録に英語教材を収めた。同書を研究者、教員、大学生、高校生等に配布し、コメントを収集して分析した結果、概ね同書が高い評価を得ていることがわかった。特に身近なトピックを題材にして、トゥールミン・モデルを用いた図解で、ステップを踏んでクリティカル・シンキングを養成する手法が高く評価された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　トゥールミン・モデルは論理的議論のためのモデルと考えられているが、1)文献研究から、モデルの構成要素の一つ一つがクリティカルに精査されてこそ議論が論理的になることが判明し、モデルをクリティカル・シンキング養成に有効なモデルとして捉え直した。2)クリティカル・シンキングの必要性を漫然と解くだけでは実効性のある指導はできない。モデルのアルゴリズムに基づいてクリティカル・シンキングのシステマティックな指導法の開発と教材作成を行った。生成AIの活用と乱用が懸念される昨今、クリティカル・シンキングは必要不可欠な思考力である。本研究は一層の精緻化を図る必要があるものの、その研究意義は大きいと考えている。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of the project was to devise pedagogy and teaching materials based on the Toulmin Model, to help Japanese students, especially senior high school and college students, as well as teachers, researchers and working adults, to cultivate their critical thinking skills, and to obtain feedback from instructors and learners in the field of education.
　As a result, we published the book Step by Step Critical Thinking using the Toulmin Model, which also includes English language materials in the appendix. It was well-received by learners/readers and received comments such as the following: "Unique and easily comprehensible book to train critical thinking"; "Full of illustrations and tasks are very helpful in developing critical thinking"; "Various topics on historical events and ordinary lives encouraged us to understand and learn critical thinking".

研究分野：英語教育、英語と日本語による批判的・論理的思考力の養成

キーワード：論理的・批判的思考力の養成　トゥールミン・モデル　体系的指導と教材作成　日常生活・異文化・歴史関連の題材　日本語と英語による教材　高校生・大学生・社会人対象

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

欧米諸国では、クリティカル・シンキングは人間教育の基礎基本をなす重要なスキルであるとして、1960 年代以降、特に 1980 年代に入って、その育成が一層重視されるようになった。クリティカル・シンキングに関する哲学的な議論や教育分野での指導に関する議論も活発に行われ、特にアメリカの教育心理学者リンダ・エルダー（Linda Elder）とリチャード・ポール（Richard Paul）を中心とする Critical Thinking Community の活動が教育界に与えた影響は大きい。日本では代表的な例として、2000 年以降、琉球大学の道田泰司氏がクリティカル・シンキングに関する先駆的な論文と書籍を発表し、学生や社会人のクリティカル・シンキングに対する認識を高め、多様な学習科目における実践と分析を行っている。京都大学の楠見孝氏も、クリティカル・シンキングの理論的・実践的研究に基づいた指導と啓発・啓蒙活動を行っている。

そのようななか、国内外の批判的思考に関する実践研究を概観すると、特定の研究分野や学習科目におけるクリティカル・シンキングの実践研究が主流で、実生活に応用するには戸惑うことが少なくない。一方、ビジネス場面でのクリティカル・シンキングの実践方法について論じる実用書は数多く出版されているが、ごく日常生活の場面とはかけ離れた場面設定がほとんどである。クリティカル・シンキングについて解説する一般書もあるが、クリティカル・シンキングの概念が総花的に提示されていることが多く、日常生活でクリティカルに考える論理的な手法が紹介されているとは言えない。例えばリンダ・エルダー（2009）は、主張に際して疑問が示されているか、どのように情報が集められているか、どういう推論が入っているか、前提は何か、概念は明確か、含意は何かなどを点検していくことが批判的思考だと述べるに留まっている。「幅広いジャンルのいかなる事象」にも適用しうる、「クリティカル・シンキングの根幹をなす思考方法のアルゴリズム」を明確に示した「体系的な指導方法と教材例」を提案している論文や書籍はほとんどなく、その研究は喫緊の課題であると考えた。

さらに本研究では、批判的思考の方法を多角的メディアで示す必要があると考えた。なぜなら、クリティカル・シンキングの研究では、ほとんどの場合、文章批判が中心であったが、近年は実社会において、多様な図版（漫画やイラスト）や映像（アニメも含めて）が情報伝達の効果的な手段となることが多いからである。

最後に、本研究では、クリティカル・シンキングの啓発を促す分野として、英語教育だけでなく、中学・高校などの他教科指導や大学での専門分野の基礎的理解においても、日本語でクリティカルに考えて議論し、問題解決を図ることも重要であると考えた。日本語を母語とする学習者にとって、日本語で理解しにくい概念を英語でいきなり理解するのは効率的ではないと考えたからである。しかしながら両言語で同一のアルゴリズムでクリティカル・シンキングをシステマティックに育成する教材はなかった。そこで、本研究では、はじめに日本語でクリティカル・シンキングの思考方法をドリル等で Step を踏んで理解させ、次に英語で異文化理解を題材としたタスクでクリティカルに考える指導法を開発する必要があると考えた。

以上の三つの背景を基に研究を行うこととしたが、研究開始にあたって、本研究のコアとなるクリティカル・シンキング（Critical Thinking）の定義を明確にする必要があることから、次のように定義した。「複数の視点から他者の意見を理解し、自己の考えを客観的に精査して論理的に思考すること」。英語を母語とする国々では常識ともいえる捉え方である。

２．研究の目的

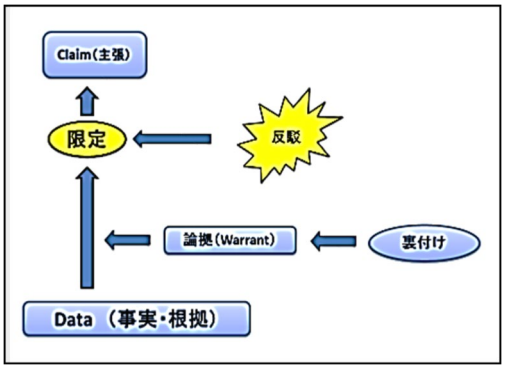
本研究の目的は、体系的かつ論理的にクリティカル・シンキングを育成する指導方法を開発し、実社会で使われているコンテンツを組み込みながら、多角的な表現形態（メディア）を用いて、日本語と英語でクリティカル・シンキングを養成する教材を作成することであった。母語で理解できない概念をいきなり英語で指導することは効率性の面では望ましくないこと、さらに、日本語で批判的な思考方法を育成しておくことが、他の教科（社会科、国語など）におけるクリティカル・シンキングの思考を容易にして、指導法の汎用性を高めると考えた。この目的を達成するために、次のふたつの下位目的を設定した。

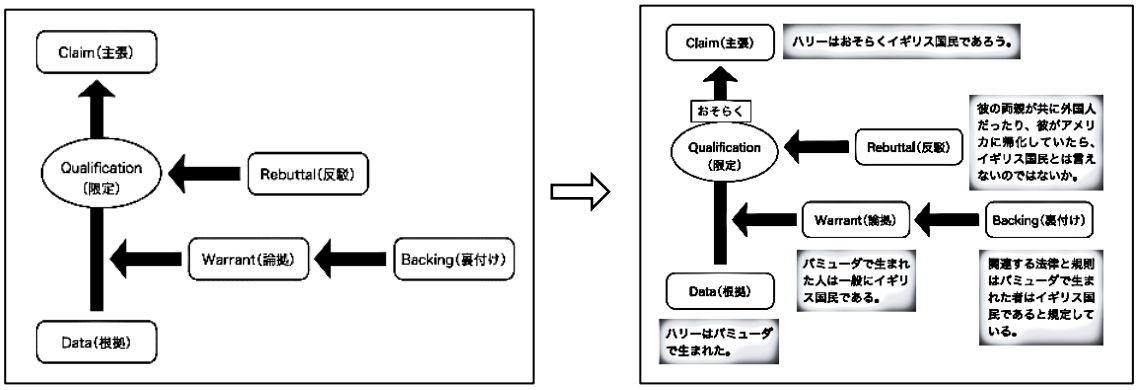
第１に、本来は議論のための技法として提案されたトゥールミン・モデルを用いて、クリティカル・シンキングの思考方法を可視化し、体系化することを目的にした。トゥールミン・モデル自体を批判的思考の方法という観点から検討し直す過程で、トゥールミン・モデルでは深く言及されていない「コンテクスト（文脈）」という要素を加味して、現代的にアップ・デートすることも目的に含めた。

第２に、これまではクリティカル・シンキングは文章（ナラティヴ）のレベルで考えられることが多かったが、本研究では対象を図版（写真や漫画やイラスト）や動画（ニュースやアニメ）にも広げて、クリティカル・シンキングの養成を図ることを目的とした。例えば、写真は確立した史料という常識があるが、実際には加工・修正されている可能性もあり、そのような写真を批判的に認識するにはどうすべきかが問われるからである。動画についても同様である。ある動画の一場面がどのアングルから撮られたかによって、異文化摩擦の問題が浮き彫りになることも多い。生成 AI の活用と乱用が懸念される昨今、多様なメディアについてクリティカルに考える力が増々求められている。

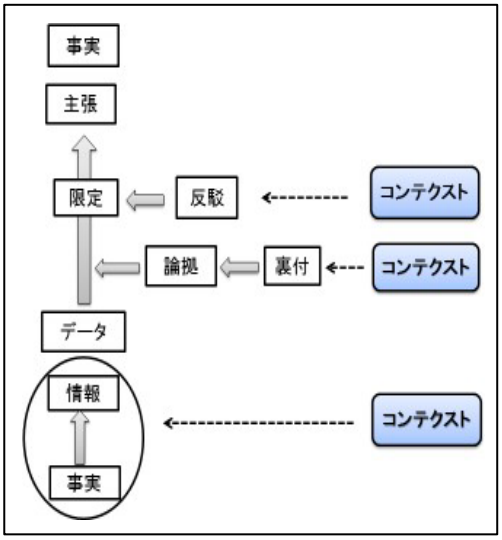
３．研究の方法

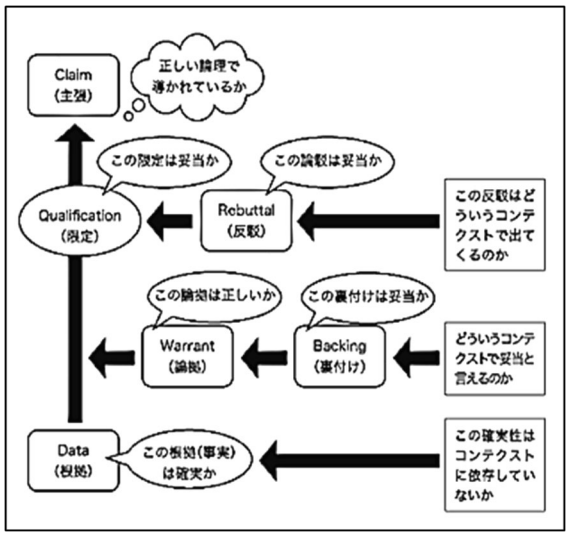
(1)　本研究のひとつ目の方法は、Stephen Toulmin が *The Uses of Argument*（1958、1963、2003）で提唱したトゥールミン・モデルを用いて批判的思考の体系化することであった。トゥールミン・モデルの概要を右図に示した。このモデルには、次のような論理の過程が組み込まれている。①人が議論をする場合、ある「事実」(Data) を「根拠」にして、②一定の「裏付け」(Backing) を持った「論拠」(Warrant) に基づいて、③一定の「主張」(Claim) をするとされている。その際、④その主張に対して、別の角度から見た「反駁」(Rebuttal) が起きることも想定し、一定の「限定」(Qualification) を付すことが必須となる。論理的に議論するプロセスで、このような検討を繰り返すことが、まさにクリティカル・シンキングなのである。さらには、どのような「事実」が「根拠」とされているのか、どういう「裏付け」や「論拠」が使われているのかを検討することもクリティカル・シンキングである。本研究では、これら一連の過程を経て論理性を高めるトゥールミン・モデルを、クリティカル・シンキングを養成するモデルとして捉え直し、具体的で多様な事例を用いながら、システマティックで学びやすい教材を作成する方法を検討することにした。トゥールミン・モデル(左図)に、トゥールミンがその著書で例示したコンテンツを当てはめると右図のようになる。





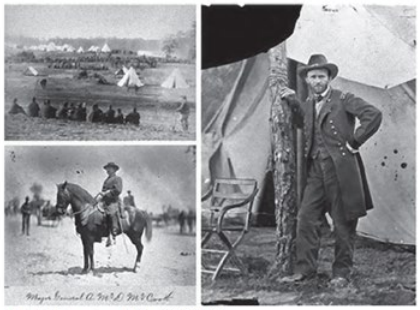
(2)　本研究の二つ目の方法は、下記の左の図に示したように、同モデルに「コンテクスト（文脈)」という要素を加味することで、現代の議論により適したかたちにモデルをアップ・デートすることであった。「コンテクスト」とは、「思考する人が置かれている状況」や「思考する際の文脈」のことで、そこには隠れた「観点・前提・含意など」が含まれている。したがって議論では、「根拠となっている事実」、「裏付けとなる証拠」、そして「反駁」さえも、「特定のコンテクスト」のもとで「特定の制約を受けて」発信されていると考える必要がある。この考え方を下記の左側に図示した。以上の(1)と(2)の考え方を統合した図を下記の右側に示した。





(3)　本研究の三つ目の方法は、図版や動画を素材としてクリティカル・シンキングを鍛錬する際にも、トゥールミン・モデルを使うことであった。例えば、写真に写っている事象をそのまま事実（根拠）として鵜呑みにすると、間違った「主張」につながる可能性がある。そこにどのような「反駁」を加えれば、より正確で論理的な結論を導き出すことができるかについて、クリティカルに考える必要がある。そのような思考回路をいかに効率的に学習者に内在化させるかについて、指導法の工夫をするとともに、適切で現実的な課題を含むタスクを考案し、それらをドリル形式で繰り返しながら学ばせる指導法について検討した。写真だけでなく、図版や漫画、動画にも同様のことが言える。その例は数多くあるが、典型的な例を調査して例示することにした。文字情報だけではなく図版や漫画なども、クリティカルな目で思考し判断できるようになることが近年では特に重要だからである。

出典：Jaubert, Alain. *Le Commissariat aux archives: Les photos qui falsifient l'histoire*, Barrault Bernard, 1986, P73



出典：http://karapaia.com/archives/52274385.html
https://www.npr.org/sections/npr-history-dept/2015/10/27/452089384/a-very-weird-photo-of-ulysses-s-grant

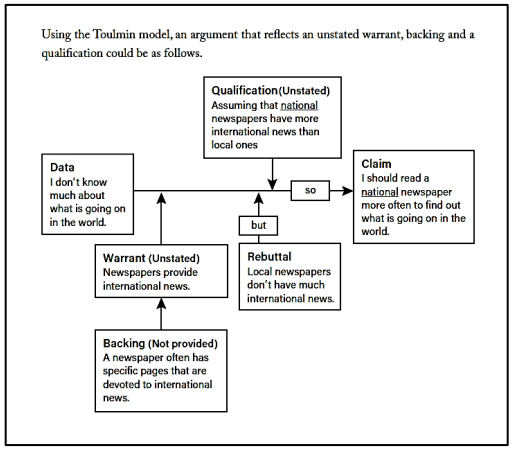
（変更前）

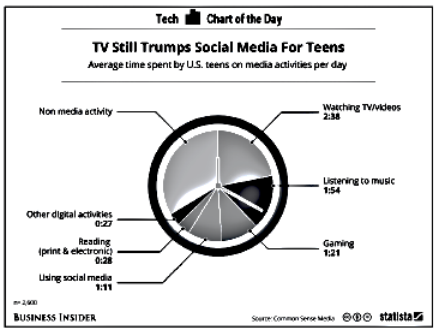
（変更後）

出典：学習まんが『少年少女日本の歴史　第20巻』（小学館）

出典：https://hokudai-horse.xsrv.jp/monogatari/04.html

(4)　第４の研究方法は、日本語と英語を用いてクリティカル・シンキングをアクティブ・ラーニングで学習できるような教材開発をすることであった。日本語と英語での思考を相互浸透的に活用することによって、クリティカル・シンキングがより効率的に学べると考えたからである。下記に示したように、すでに日本語で理解しているトゥールミン・モデルを英語で学び直し、社会問題や環境問題などのグローバルでホットな英語のニュース記事をクリティカルに読解できるように、多様な英語のタスクを準備し解説することにした。





https://www.businessinsider.in/Teens-are-entertaining-themselves-the-same-ways-they-always-have/articleshow/49775089.cms

４．研究成果

研究の成果として、『図解で学ぶクリティカル・シンキング：トゥールミン・モデルを活かして』(アルファベータブックス、2022) を出版した(272 頁)。同書の本論（170 頁）には、日本語によるクリティカル・シンキングの解説と教材を含め、英語教材 *Critical Thinking using the Toulmin Model*（93 頁）は付録として収めた。

同書では、身近なトピックを素材にして、トゥールミン・モデルを活用しながら「根拠」から「主張」にいたる道筋を批判的に検討する諸段階について解説した。同時に多様なドリルを豊富に作成し、タスクを通してクリティカル・シンキングを理解し育成できるようにした。素材としては、文章のほか図版を多数取り入れた。動画は著作権上の問題から含められなかった。同書を研究者、教員、大学生、高校生、社会人に配布し、コメントを収集し分析した。その結果、概ね同書が次の点で高い評価を得ていることがわかった。①身近なトピックを題材にしていて親しみ易い。②トゥールミン・モデルを用いた図解で、ステップを踏んでクリティカル・シンキングを養成する手法がわかり易い。③クリティカル・シンキングとは単なる「揚げ足取り」ではなく、重要な論理過程であることがよく示されている。④ドリルを通してクリティカル・シンキングの思考方法が実践的に学べて興味深かった。

学術的成果については、トゥールミン・モデルは論理的議論のためのモデルと考えられているが、①文献研究の結果、モデルの構成要素のひとつひとつがクリティカルに精査されてこそ議論が論理的になることが判明し、そのモデルをクリティカル・シンキング養成に有効なモデルとして捉え直したこと、②クリティカル・シンキングの必要性を漫然と解くだけでは実効性のある指導はできないことから、トゥールミン・モデルのアルゴリズムに基づいてクリティカル・シンキングのシステマティックな指導法を開発し、その教材化を行ったことに意義があると思われる。

生成 AI の活用と乱用が懸念される昨今、クリティカル・シンキングは必要不可欠な思考力である。その指導法と教材開発を行って、学習者の反応を確認した本研究の意義は大きいと考えている。

＜引用文献＞

Elder, L. and Paul R. (2009) *Guide to Critical Thinking,* The Foundation for Critical Thinking, California.

Toulmin, E. S. (1958, 1968, 2003) *The Uses of Argument,* Cambridge University Press, Cambridge（戸田山和久・福澤一吉訳（2011）『議論の技法―トゥールミンモデルの原点』東京図書）.

楠見 孝，子安増生，道田泰司（2011）『批判的思考力を育む　―学士力と社会人基礎力の基盤形成』有斐閣.

椎名紀久子（編著）(2011)『英語の批判的読解力と論理的発表力の育成―小中高大における系統的母語指導と連携して』(研究代表者 椎名紀久子）2008-2011 科学研究費補助金基盤研究（B）研究課題番号:20320076 研究成果報告書.

椎名紀久子，後藤希望，森川セーラ，南塚信吾（2022)『図解で学ぶクリティカル・シンキング：トゥールミン・モデルを活かして』アルファベータブックス.

道田泰司（2001)「批判的思考の諸概念：人はそれを何だと考えているか?」『琉球大学教育学部紀要』第59号，pp.109-127.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　11件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 南塚信吾	４．巻 1023
２．論文標題 ウクライナ侵攻と新自由主義	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『歴史学研究』	６．最初と最後の頁 74 - 76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 南塚信吾	４．巻 No.27
２．論文標題 「万国史」における東ヨーロッパ Ⅰ- (2)	５．発行年 2022年
３．雑誌名 世界史研究所「世界史の眼」https://riwh.jp/category/eye/	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 南塚信吾	４．巻 No.30
２．論文標題 「万国史」における東ヨーロッパ　Ⅰ- (3)	５．発行年 2022年
３．雑誌名 世界史研究所「世界史の眼」https://riwh.jp/category/eye/	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 南塚信吾	４．巻 No.33
２．論文標題 ウクライナ戦争への新たな見方	５．発行年 2022年
３．雑誌名 世界史研究所「世界史寸評」https://riwh.jp/category/eye/	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 南塚信吾	4．巻 -
2．論文標題 「万国史」における東ヨーロッパ I-(1)	5．発行年 2022年
3．雑誌名 世界史研究所 ［世界史の眼 No24 ］https://riwh.jp/category/eye/	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 南塚信吾、小谷汪之、藤田進、木畑洋一、山崎信一、渡邊勲	4．巻 -
2．論文標題 書評：『世界史とは何か』(岩波講座 世界歴史01)	5．発行年 2022年
3．雑誌名 世界史研究所 ［世界史の眼 No.23］https://riwh.jp/category/eye/	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 南塚信吾	4．巻 －
2．論文標題 書評：『世界哲学史別巻－未来をひらく』(ちくま新書2020)	5．発行年 2021年
3．雑誌名 世界史研究所 ［世界史の眼 No.17］ https://riwh.jp/category/eye/	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 南塚信吾	4．巻 －
2．論文標題 『世界婦人』の伝える世界情報	5．発行年 2021年
3．雑誌名 世界史研究所 ［世界史の眼 No.21］https://riwh.jp/category/eye/	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 南塚信吾・小谷汪之・木畑洋一	4．巻 No.1008
2．論文標題 シリーズ『日本の中の世界史』への書評に関して考えること	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『歴史学研究』	6．最初と最後の頁 49-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 後藤希望	4．巻 Vol.8
2．論文標題 「戦艦テレメール号」と共に見る遷り変わり	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Artes MUNDI	6．最初と最後の頁 113 -113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 後藤希望	4．巻 Vol.7
2．論文標題 「ザ・ビートルズコレクション」と生演奏	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Artes MUNDI	6．最初と最後の頁 128-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 後藤希望	4．巻 Vol.7
2．論文標題 一九六四年東京大会から「東京二〇二〇」へ：分断と融合	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Artes MUNDI	6．最初と最後の頁 145-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 椎名 紀久子	４．巻 第5号
２．論文標題 Computer支援によるListening Comprehension 科目の実践と評価―難易度別CALL教材Listen to Me!による一斉授業と自律学習の融合―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 名古屋外国語大学論集	６．最初と最後の頁 29-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　4件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Adriana Estevez, Jody Shimoda, Sarah Morikawa
２．発表標題 Reflections on ESAP Curriculum Design for Engineering and Science Students
３．学会等名 Japan Association for Language Teaching Annual International Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 後藤希望
２．発表標題 プレゼン力の向上
３．学会等名 岐阜県教育委員会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 後藤希望
２．発表標題 スポーツ報道における女性像
３．学会等名 名古屋市教育委員会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 後藤希望
２．発表標題 私らしく輝くヒント
３．学会等名 名古屋市教育委員会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 後藤希望
２．発表標題 メディアの中の女性
３．学会等名 豊田市男女共同参画センター（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 森川 セーラ，椎名 紀久子
２．発表標題 Promoting Logical Argument in Academic Writing
３．学会等名 JALT Conference (45th Annual International Conference) at Nagoya City, Aichi, Japan（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 椎名紀久子、森 明智
２．発表標題 学習者の聴解力を最大限に伸ばすためのWeb教材の難易度に関する考察
３．学会等名 外国語教育メディア学会(LET) 第92回(2018年度秋季) 中部支部研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 森川セーラ、西住奏子
２．発表標題 Language Exchange Partnerships: Reflections on the first year
３．学会等名 JALT Pan-Sig Conference　2018年度大会(東洋学園大学)
４．発表年 2018年

１．発表者名 森川セーラ、西住奏子
２．発表標題 Supporting learner autonomy in a language exchange programme
３．学会等名 JALT Conference at Shizuoka Convention and Arts Centre)
４．発表年 2018年

〔図書〕　計9件

１．著者名 椎名紀久子・森川セーラ・後藤希望・南塚信吾	４．発行年 2022年
２．出版社 アルファベータ・ブックス	５．総ページ数 272
３．書名 図解で学ぶクリティカル・シンキング：トゥールミン・モデルを活かして	

１．著者名 南塚信吾・小谷汪之・木畑洋一編	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 222
３．書名 歴史はなぜ必要なのかー「脱歴史時代」へのメッセージ	

１．著者名 椎名紀久子	４．発行年 2022年
２．出版社 学術研究出版	５．総ページ数 325
３．書名 続・英語教育の科学：三ラウンド・システムの理論と中高大での教育実践（竹蓋順子編著）「5.3 対面授業とe-learningによる自習を融合させたListen to Me! の授業設計」(P138-163)	

１．著者名 南塚信吾、西川正幹	４．発行年 2021年
２．出版社 アルファーベータブックス	５．総ページ数 540
３．書名 神川松子・西川末三と測機舎：日本初の生産協同組合の誕生	

１．著者名 南塚信吾編著	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 375
３．書名 国際関係史から世界史へ	

１．著者名 南塚信吾、小谷汪之	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 280
３．書名 歴史的に考えるとはどういうことか「第１章 歴史と出会うとき」（P3-30），「第8章 日常の中で歴史的に考える「七カ条」」(P217-249)	

1．著者名 南塚信吾	4．発行年 2018年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 254
3．書名 「連動」する世界史：19世紀世界の中の日本	

1．著者名 後藤希望	4．発行年 2019年
2．出版社 名古屋外国語大学出版会	5．総ページ数 138
3．書名 学びの技法：地域を読み、世界を拓く10章「第10章 近代オリンピック選手団を考察する視座」（P123-138）	

1．著者名 後藤希望	4．発行年 2018年
2．出版社 名古屋外国語大学出版会	5．総ページ数 240
3．書名 世界教養72のレシピ 「学際章：メディアとコミュニケーション：ジャーナリズム「フェイクニュースとファクトチェック」」（P152-154）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	後藤　希望 (Goto Nozomi) (10726855)	名古屋外国語大学・現代国際学部・准教授 (33925)	
研究分担者	森川　セーラ (Morikawa Sarah) (80506882)	千葉大学・大学院国際学術研究院・准教授 (12501)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	南塚　信吾 (Minamizuka Shingo) (50055315)	法政大学・国際文化学部・名誉教授 (32675)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関